

東日本大震災支援活動のなかで —「協同っていいかも」を指針に—

地域と協同の研究センター 専務理事 向井 忍 寄稿（2011年4月21日記）

3月11日東北地方太平洋沖で発生したM9.0の地震は、巨大津波、原発事故を伴って、日本と世界に大きな影響を与えています。亡くなられた方のご冥福をお祈りするとともに、被災された方々と地域が一日も早く安心できる生活に戻ることを願います。

第7回東海交流フォーラムはこの大震災の翌日に開催しました。甚大な被害が刻々と明らかになり中止（延期）も考えましたが、午後の分散会を短縮して開催することとしました。午前中の全体会では、「協同っていいかも」をテーマにした基調提案と、地域生協・医療生協・大学生協・農協・社会福法人の現場でくらしや地域の変化に向き合ってどんな協同が生まれているかの実践報告がされました。今回のニュースはこの特集としていますが、震災支援の状況についての会員の取り組み状況も紹介したいと思います。

震災直後から様々な協同の力が発揮されています。大震災の当日には、被災県の生協は直ちに自治体に災害時緊急物資を提供し、店舗では夜間営業時間を延長して組合員の利用に応えました。日本生協連も対策本部を立ち上げ、緊急支援物資を送り、全国の生協には被災地の状況や支援情報の発信を開始しました。各地の生協が現地支援にかけつけ、商品・物資・燃料を届け、のべ2000人を超える職員が、組合員へのお見舞いや事業再開支援を続けてきています。組合員からの緊急募金額もかつてない金額になっています。

また、全国や県段階で横断的な連携が呼びかけられ、NPO、社会福祉協議会、災害ボランティア組織、大学（研究者）や企業ボランティアと自治体がこれまで以上の連携や協働をすすめています。愛知県でも3月15日に「あいち・なごや東北関東大震災ボランティア支援連絡会」がスタートしました。一般のボランティアが現地に向かうことは困難な状況の中、同連絡会では「支援の入らない地域をつくらない」「最後のひとりまで」息の長い支援を行うため、分野・組織の垣根を越えた連携が必要と相談されています（同連絡会ホームページより）。岩手県や宮城県を足場に活動しているNPOは、地元の社会福祉協議会や自治体と協力しながら、被災者の要望や声を丁寧に聞き取り、地域社会の復興の目標づくりに関わっています。コープあいちは、愛知県（防災局）と同連絡会の窓口4団体（愛知県社会福祉協議会、名古屋市社会福祉協議会、NPOレスキューストックヤード（名古屋市）、NPO愛知ネット（安城市））を訪問し、連絡会の一員としての活動を始めています。連絡会では「それぞれが本業での支援活動をすすめつつ、得意分野で補いあって、できることを積み重ねていこう」と話し合っています。

設立15周年を迎えた地域と協同の研究センターは、各協同組合（生協、農協、労協）や社会福祉法人、NPOやワーカーズのつながりを積み上げて「地域と協同」の価値を探求してきました。こうした私達のひとりの支え合いや協同の力が、いわゆる危機管理（リスクマネジメント）アプローチでどこまで機能するかについては現在の日本社会での協同について考え深めていく上で欠かせないテーマになります。被災者の方々の生活再建支援を最優先にしつつ、我々が中長期的に何ができ、何を進めていくべきか。これまでの支援活動とあわせて、市民社会の一員として、協同（協働）の力を発揮しながら形にしていけることが求められていると考えます。

フォーラムの中でも「緊急時のセーフティネットづくり」が話題になりました。来年2012年は国際協同組合年です。この一年間は、大災害からの復興とそして何より安心してらせる社会づくりへの実践を語り交流していきたいと思っています。会員それぞれが、フォーラムの呼びかけ「協同っていいかも」への答を引き続き考えていく年にしたいと考えます。



研究センターNEWS

東日本大震災への救援・復興支援と震災対策の取り組み状況

（東海交流フォーラム 全体会でご報告いただいた方々(団体)より寄せていただきました）

<大学生協東海ブロック 大谷 光一さんより>

大学生協では震災直後から全国200の大学生協で店頭や学内、また街頭などで震災救援募金のとりくみを展開しています。11日現在で約2,200万円の募金に協力をいただきました。この震災でご父母を亡くされた学生の皆さんに一律3万円のお見舞金を送るとりくみを実施しています。また、主たる家計維持者を亡くされた自宅外生組合員を対象に、ご協力をいただける不動産会社等を通じて新規入居の際の家賃無料や手数料の無料の支援を行います。また生協オリジナル物件に入居(中)の方には家賃・管理費等の半年間半額を実施します。

他生協への支援活動では、日本生協連の呼びかけにも応え3月27日から4月3日までコープふくしまの支援に東海地区からは名古屋大生協の2名の職員と名工大生協の車両が参加しました。その後の日程も含め(4月4日から10日まで)大学生協としては合計6名が参加しています。

また、宮城県災害ボランティアセンターと協力し「大学生協ボランティアセンター」を立ち上げました。当面、4月18日から5月8日までの期間を各4泊5日で5つのチームに分け、各チーム50名ずつで仙台市を拠点に多賀城市・石巻市・塩竈市にてボランティア活動を展開しています。学生の参加がしやすいように、現地での宿泊、食事については大学生協が負担することとしています。

<JA愛知東 片桐 昌司さんより>

愛知県農協中央会では、義援金を取りまとめました。各県連(中央会、経済連、信連、共済連、厚生連)が100万円ずつ計500万円、県内20JAが各25万円ずつ計500万円、合わせて1000万円の義援金となりました。上記に加え、農協役員全員が義援金に応じており、各農協の本店支店の窓口では募金箱を設置して、組合員へ呼びかけています。

支援物資は、単協ごとでまちまちですが、愛知東農協としては、コメ(あいちのかおり)60俵、しんしろ茶200ケース(ペットボトル500ml 12本/ケース)を送りました。愛知県下では、3月13日、第1便としてトラック2台、30日には第2便としてトラック2台が発しました。

地域では、季節がら春の祭りが行われており、あちらこちらのお宮(大字単位)に義援金箱を置いて集め、役場へ持っていっています。

<ゆたか福祉会 山崎 恭裕さんより>

きょうされん(全国の共同作業所から生まれた組織)は、直ちに災害対策本部を立ち上げ、被災地域の被害実態の把握と救援活動に向け、準備に入りました。それを受けて、ゆたか福祉会でも3月14日に、理事長を本部長として災害対策本部を設置し、利用者・家族・職員関係者の家族などの被害状況の把握と救援募金の呼びかけ、救援ボランティアの組織など東北地方への救援・復興支援の取り組みと共に、東海地震・東南海地震の発生に備

えて、災害対策マニュアルの整備をはじめ、危機管理への対応を急ぐよう呼びかけ、対策を急いでいます。

現在、すべての障害者関係団体で構成するJDF(日本障害フォーラム)が宮城、福島、岩手に救援センターを設置(準備も含め)し、現地の障害者団体と協力しながら、被害の実態調査と行政への要望を中心に支援活動を行っており、ゆたか福祉会からも毎週職員を派遣しています。

<コープみえより>

東海交流フォーラムの1週間後、渡辺・浦北、そして1か月後には橋本が震災の地、宮城県へ支援に行きました。

○渡辺 晃さんより

支援活動ではみやぎ生協の職員とお見舞い活動を致しました。僅かではありますがパンとお茶をお配りしました。組合員さんの一言目がまず、みやぎ生協職員への「大丈夫だった?」という一言から始まります。そこには普段の買い手と売り手の立場は存在せずお互い組合員という立場でした。

中には「私の住んでいる場所よりもっと状況の酷い場所へ届けて欲しいから」と受け取りを拒否する方もたくさんみえました。お互いが思いやり助け合うという生協ならではのの本質を改めて感じる事が出来た支援でした。

○橋本 直行さんより

4月4日～6日、サンネット事業連合(仙台市)へオリコン1,500個を搬送しました。NPT等これまでにたくさんの方々に出会えたことで、全国にたくさんの仲間ができました。苦しい時、辛い時も協同でと思い、微力ですが被災されたみなさんのお力に少しでもなればと支援に参加させていただきました。福島県に入ると景色も一変し、かなり被害を受けていました。被災地から帰る際は、このまま帰ってよいのかという想いがめぐり後ろ髪をひかれる思いでした。ユニセフも支援に入り、復興には長い時間がかかると思われまます。被災された方々のために私たち一人ひとりが、できることをつなぎ、ひろげていきましょう。

○浦北 豊さんより

私は、初日、津波に襲われた地域の避難所へ支援物資を届ける役目でした。戦場で荒れた土地と同じような感覚に襲われ、その景色の恐ろしさに身が震えたことを覚えています。しかし、そのような場所にも全国から集まった生協のトラックは、支援物資を届けていました。避難所になっている小学校には、何人もの方がいましたが、物資の荷卸しや仕分け、そして炊き出しなど、協力して行っていました。その後は、組合員宅への安否確認とお見舞いの活動にも取り組みました。職員と互いに無事を確かめあい、泣いている組合員の方もいます。

日本人の冷静さが報道されていましたが、震災の現場で感じたのは、被災された方が協力している様子です。この体験を通してでも、そうですが、人はたすけあい協同して生きていく、それが自然で最も人間らしい生き方のかもしれないと改めて考えられました。

地域と協同の研究センター設立15周年・NPO法人化10周年記念第7回東海交流フォーラム

「協同っていいかも？」

実践報告～協同っていいよね！現場からの問いかけ～

今年度の第7回東海交流フォーラムは、3月12日（土）に、地域と協同の研究センター設立15周年、NPO法人化10周年の記念企画として取り組みました。東日本大震災の翌日に開催することとなり、冒頭、向井専務理事より、時間を短縮して行うことでお願いし始めました。全体の報告は、別途報告集の発行を予定していますので、研究センターNEWSではその一部を紹介させていただきます。

開会挨拶

代表理事 川崎直巳

皆さん、おはようございます。生協関係の情報は、日本生協連に集中をして、対策本部を立ち上げておりますので、全体ではその動きの中でこれからの対応をしていくと報告を受けております。状況は時々刻々変化をしておりますが、物資の支援等は当面、水3万本、インスタントラーメン3万食等積んで、トラックで東北地方へ向かうという初動を開始したということをお知らせしております。



代表理事 川崎直巳

今日の第7回交流フォーラムは、昨年、メインの報告を南医療生協の成瀬専務にさせていただいき、その時の「協同組合っていいかも」という、力強い期待のメッセージから引き続きもう一步すすんだ報告を成瀬専務にお願いしました。協同の取り組みは、どこかの組織が立派なことをやっているということではなく、それぞれの地域で、たくさんの事例がすすんでいることを参加者自身で実感し、これからの取り組みに生かしていくことが大切です。そんな事例を、たくさんの皆さんより紹介いただき、交流し、そのことを今日の獲得目標として企画をさせていただきました。よろしくお祈りいたします。

基調提案 「協同っていいかも？」

南医療生協 専務理事 成瀬幸雄さん

南医療生協の専務理事の成瀬と申します。テーマの「協同っていいかも？」は、まちにむかって、「協同っていいかも？」って叫ぶと、こだまして、向こうから「協同っていいよ！」と返ってくる、そんなイメージです。「協同っていいかも？」とまちの中、あるいは職場の中で響き渡ったときに「協同っていいよ！」という、そういう風な協同組合やまちづくりができるということが一つの結論です。協同というのは、私は人類の普遍的な価値だと思います。しかし、協同組合というのもすごいというのは少し違います。協同組合は、理事会の能力をこえて存在することはありません。協同組合が、本当に素晴らしいといえるのは役職員、組合員がそういう協同をしているかどうかということではないでしょうか。

協同組合というものがいい、素晴らしいと言える一つのベースは、自分の言葉を大切にすること、自分の言葉から

出発するということだと思います。稚拙だとか、論理的でないとか言われても、くらしの中の一人一人の言葉から出発する、それが何より大事で、協同組合としての南医療生協はそこを出発点にしています。こういう風に困っている、こうして欲しい、私はこう思う、こうあって欲しい、それが一人一人のくらしの中から出されている言葉なら、それはかけがえのない大事な言葉だと思います。それを出発点に議論できるとしたら、それはいいと思います。また、自分の言葉、体験から出された言葉は訂正がききます。誤りがあっても、「ごめんね、俺の意見よりあんたのほうがすごい」「あんたの体験の方が建設的だ」といつだって訂正がききます。また、一人一人が大事にされた時、その組織を壊す人はいないと思います。一人一人の立つ瀬をつくって、みんなでやる、そういうことが協同っていいかもとこだまするのではないかと思います。

南医療生協は50年になりますが、本当にいい医療を考える時、地域と一体となるといい医療、いい介護といえる経験が、どんどん積み上げられてきています。国家資格をもった人が医療を行うのは、診察室、手術室、病院です。しかし、一人暮らしが多くなっている中で、例えば手術をした後、家に帰っても、買い物にも行けない場合があります。その時、組合員がいて、班があって、「買い物するよ！」「見守りが必要なら、声かけるけどいいかな？」という風に、診察室を出て、地域社会や家族やまわり



南医療生協 成瀬幸雄さん

の人、協同組合の班や支部、無理せず、適当に、嫌な時には目を伏せて、だけどやれるところでやると輪が広がっていきます。国や学会で考えられた地域医療の概念を、地域から書き換えられていく医療、地域からつくり出していく言語に変えることができると思います。そういうことで、協同ないしは協同組合が「協同っていいかも？」と言える内容をつくり出すのではないのでしょうか。

よい医療、介護というのは4つの指標があると思います。1つは、医療、介護サービスに社会的水準が保たれていることです。2つめは、不必要なことはしないということ。3つめに、納得と同意に基づいてサービスが行われること。4つめは、地域社会に支え合いや助け合いの地域のネットワークがあることです。この4つの指標から、我々の医療、介護を建設していこうということ

議論して、「協同っていいかも？」と言い合っているうちに、都会でバラバラになった人と人が紡ぎ合い、つながり合っていく、溶け合っていく、そういうことが可能じゃないでしょうか。そういうことを提起させていただきたいと思います。

最後に、阪神大震災から、学ばなければいけないこといくつかあります。物資が届けられると最初は奪い合いがあります。その時、さりげなく出された一枚の張り紙がありました。「うばい合えば足らぬ。わけ合えばあまる。」（相田みつを）です。これは協同組合の協同の精神かと思えます。そういうふうに、我々協同組合人は、いついかなる時も考えていないといけないと思えます。



日頃から協同ということをよく議論し合いながら、一人一人にとって一番いいことは何か、人権とか地域社会の人の絆という視点から、そういうものごとの出発を自分の言葉から出発し、自分の家族や自分の弱っていることを助けてほしい、力を貸してほしいということを協同組合の議論に乗せながら、自分のことばで、協同っていいかもという、そういう積み上げがあるといいなと思います。

日頃から協同ということをよく議論し合いながら、一人一人にとって一番いいことは何か、人権とか地域社会の人の絆という視点から、そういうものごとの出発を自分の言葉から出発し、自分の家族や自分の弱っていることを助けてほしい、力を貸してほしいということを協同組合の議論に乗せながら、自分のことばで、協同っていいかもという、そういう積み上げがあるといいなと思います。

実践報告 ①地域生協の実践から

生活協同組合コープみえ 渡辺晃さん・猪飼健二さん <渡辺さんからの報告>

大安センターは、三重県北部位置する員弁市にあり、供給規模で15億のセンターです。紅葉で有名な名所もあります。

大安センターの特徴のひとつは高齢者が多く利用されていることです。滞在時間の関係で、配達では満足いくコミュニケーションができないので、担当者ニュースを発行して補っています。毎週のお勧め商品や自分の趣味、日常を書いたりして、返事をいただいたり、ファイルしているといってくれる人がいて、どんどん力が入って発行しています。ある組合員から、生協の日は孫に会う気持ちで来ていると言われて、配達は楽しいと心の底から思うことがあります。配達からの帰着後、次週の注文がなく、電話で連絡して注文の確認をしています。その時、「あなたが渡辺さん？ 毎週ニュース楽しみにしているよ」と言われ、「いつも会っているみたい」と配達で合ったことがない組合員に言われてびっくりしたこともあります。

今年は大雪の中での配達が多々ありました。配達先へ行くと組合員さんが雪かきしてみえ、私も一緒にやることがありました。初めて雪の重さを知りました。高齢者にとってたいへんな作業で、雪かきをできない人もいました。また、一緒に雪かきしているとき、組合員さんが以前に足すべらせてケガをしたと言われ、すぐに共済のケガの申請用紙をお渡ししましたが「書類を書くのが

苦手だから、もういいわ！」と言われ、配達後に寄って、記入のお手伝いをしました。それからは、給付申請の呼びかけとともに「不明な点があればご相談してください」と付け加えるようにしています。

<猪飼さんからの報告>

私たち大安センターは、お店がないので配達ということで地域におじゃましています。

地域でコープみえに入ってくれる方を日々探すために努力しています。その中で、いろいろ意見を聞きます。「生協やってみたいけど、注文の仕方がわからない。」「注文用紙が見づらい。」等の意見があり、職員から「こういうおじいちゃんやおばあちゃん、なんとかならんかな？」という声が出ました。そこで、御用聞きをしてはどうか、電話サービスはどうかと考えました。新規の高齢者中心ですが、現在、登録は15名です。88歳が一番高齢で、お一人暮らしの方です。平均で78歳です。

「注文用紙は見にくいけど、聞きとってもらえるから助かる。」「忘れていても、電話してもらえるから、それまでに見ておくれ。」「私の話につきあってくれてうれしかった。ありがとう。」「と言われます。スタートしたばかりで人数は少ないですが、これからもっと広めたいと思います。この電話注文サービスは、高齢化社会を迎えるにあたって、もっともプラスになっていくと思います。ありがとうございました。



コープみえ 渡辺さん・猪飼さん

実践報告 ②医療生協の実践から

西濃医療生協 専務理事 松岡和彦さん

簡単に西濃医療生協の紹介をさせていただきます。

大垣市、木曾三川の西側に、私たちの診療所、介護事業所があります。田んぼの真ん中で、診療所と介護事業のデイサービス、ケアプラン作成の事業をしています。2年間、医療生協の設立の発起人会の運動を経て、発足して10年になります。2001年6月に創立総会を開催することができ、翌年に3つの事業を開所しました。その後、古民家を改装した認知症デイサービス、訪問介護ステーションを開設し、現在5つの事業を行っています。組織の状況は、組合員3200人、出資金1億1000万円と東海でいちばん小さな生協です。組合員の年齢構成は60代70代で過半数を占める高齢組織ではありますが、担い手の中心であり、元気な方々です。

ケアマネージャーは、介護サービスを受けたい人からの話を伺いながら、まずは介護認定を受けていただき、それに基づいて介護サービスを提供します。また、悩みごとの相談活動も行っています。その中でも、病院から退院した後どうしたらいいかなど、家族の方の悩みは多くあります。大垣市には、大きな市民病院がありますが、

入院すると同時に、退院のことを考えないといけません。市民病院にもよらず相談室ができました。そこから「退院されるが」と相談があります。自分自身の介護も不安という相談もあります。今すぐヘルパーに来て欲しいわけではないが、とりえず認定を受けたいという方もあります。話し合いの中で必要であれば、介護認定の代行申請のお手伝いもしています。地域包括センターや、社協、行政との連携でつないでいくという形で、問題解決の一步、二歩とすすめていることが特徴的なところです。

そういう中で感じることは、独居の方、複数で住んでも昼間は一人の方、老老介護の方で社会的支えが必要な方が増え、地域の中で孤立している方もいらっしゃいます。実際に、昨年の夏は全国的に熱中症が多く、ある民政委員から、大垣市内でも亡くなっている方がみえると聞いてショックを受けました。

最近では、こんなケースもありました。92歳の方で、同居していた息子さんが亡くなられ、その方一人になり、ほとんどベッド

で寝ている方ですが、本人が自宅で療養したいと言われ、市の担当の方、地元の民政委員、自治会長などみんなに声をかけて合同の話し合いの場をつくりま



西濃医療生協 松岡和彦さん

した。そこで、ご本人からここにいたいという思いを話され、みんなで協力してサポートしようと確認しました。1年半後に亡くなりましたが、その間、行政も一緒にサポートできたと思っています。

別の話題で、診療所の送迎をやっていますが、田んぼ越しに家が見え、そこから通うのも大変で、今では送迎は欠かせなくなっています。組合員でやってもらっています。運転は有償で、利用者は無料で、1か月にのべ240人くらい利用しています。

不十分なところばかりですが、どうやっていったらいいかということで「協同っていいな!」というテーマに向き合わないといけないなと思いました。「協同っていいかも?」という出し方を僕らはしないといけないと思います。「協同っていいよね」と跳ね返ってもらえるようなことをしていけないといけないと思います。

実践報告 ③大学生協の実践から

全国大学生協連合会 東海事業連合 森田美紀さん

大学生協東海事業連合でキャリア形成事業を担当しております森田と申します。

大学生協は4つ使命を掲げています。その4つの使命とは、協同、協力、自立、参加です。誰かと協力して何かするということや、若い世代ですので自立の支援、もっとも深いところに協同の精神を育むということがあります。

大学生の状況で、最近深刻だと思っているのは、友達がいないと生きていけないが、自分から友達がつかれない人が多くなっているということです。2005年に

「便所飯」という言葉が流行しました。一人でご飯が食べられない、一人だとカッコ悪いので、食事をお手洗いで食べている。そのうち、一人が心地よくなり、人との関わりも持たなくなってしまい、怖くて大学に行けなくなる。不登校です。大学へ行けないと単位が足りず、退学、休学になります。親御さんも困ってしまう。こうした問題は、1年生の始まった時に、友だちができなくて、ドロップアウトという形で表れます。せっかく入ったのに、大学へ行かない、一人暮らしだと思っているかどうかかわからないということが起きています。

もう一つ、大学生になりきれない先輩がたくさんいます。就活の時期に、やり方を教えてもらってないからできなくて当然で、就活のやり方教えてくださいという発想があります。「がんばったことなに?」と聞かれて、「ない」と答える人が多く、感動した経験がない人がたくさんいます。そういう中で支援で、今やっているのは、ビジョナビセミナーという取り組みです。1300人が東海地方で参加しました。13大学で実施しています。大学時代とは人生の節目で、本人たちが自覚し、学生時代に何をするのか気づいてもらい、やる気になってもらうという場です。では大学時代に何をするのかを知っているのは誰かという、先輩です。その先輩に登場してもらい、経験したこと、後悔したこと、充実したことを、伝える機会にしています。4年間のビジョンと目標を持ってもらえるように、入学前に行っているセミナーが大学生協で取り組んでいる事業です。

もう一つ、オリジナルパソコン講座があります。パソコンは大学生活で必要ですので販売していますが、大学の勉強で使えるように、オリジナルパソコン講座を始めました。これは、先輩が必要だと思ったスキルを教えるという講座です。論文やレポートを書くために必要なスキルを教えます。7大学で2千人が受講し、1万人くらいが今までに受講しています。プログラムの作成、講師、運営、すべて学生の組合員で運営しています。講師は講座の受講生から募集し、教えるため必要なトレーニングをし半年くらいかけて準備します。



大学生協連 森田美紀さん

大学生協が対象とする組合員は18~24歳の成長期の方です。この成長期に気づかされたことがあり、人と何かする、自己成長を実感すると、誰かに同じことをしてあげたくなります。自分がされると、してあげたくなり、いいことも悪いこともそうだと思います。大学生協で成長できた経験を後輩に伝え、失敗したことも伝え、そうしながら協同の精神を育んでいきたいと思っています。大学生協は4つの使命で自立を掲げていますが、自分が自立しないと人を助けることはできない、若い世代にそういうことを考えてもらいたいと思っています。

実践報告 ④農協の実践から

JA愛知東 片桐邑司さん

現在は愛知東農協の非常勤の理事をしています。私に関わってきた、東栄町農協を軸にお話しをさせていただきます。

愛知東農協は、東は静岡県、北は長野県境に位置しており、愛知県の面積の1/5を占めています。人口は65,000人ほどで、県人口の1%パーセントにもなりません。山間部が多くを占めており、少子高齢化が進む過疎地域にあります。平成4年、新城市、鳳来町、作手村の3農協が合併しました。平成14年には2町3村の北設楽郡のやまびこ農協と合併した広域な農協になっています。

管内の農業粗生産額は、ピーク時が平成3年の150億円でした。現在では約100億円を切るという状況になっております。農協の農畜産物の取引高も50億円から昨年は36億円となっています。農地は約5,000haありますが、そのうち耕作放棄地は約13%あります。県平均の2倍くらいです。

私が入組したのは昭和35年（1960年）でした。東栄町農協は1町5村の町村合併で6つの農協が合併しました。当時の農家の主な収入源は養蚕、政府売渡しの米、冬の仕事の串柿などでした。

昭和40年（1965年）代になると、養蚕は化学繊維にその座を奪われて衰退し、昭和42年（1967年）に肉専用の鶏ブロイラー生産の計画をたてました。国による第1次農業改良改善事業を取り入れ、農協の施設として共同育雛所、食鶏処理加工施設を建設し、農家は飼育施設を建設し事業化しました。昭和47年（1972年）には、73戸の農家で年間92万羽の生産がされるようになりました。（1戸あたりの平均12,300羽）この時代は思うように売れ、農家も農協も大変儲かりました。

昭和50年（1975年）代に入ると、九州や東北で規模拡大が進み、生産過剰となり価格低迷期に入りました。当農協も規模拡大を図り、昭和50年

（1975年）より5ヶ年で第3次農業構造改善事業に取り組み、生産法人6団地の造成を図り、農

家数は20戸に減少しました。年間生産羽数は140万羽の規模となり、農家所得目標300万円を目指しました。1農家あたり平均出荷数は7万羽になり、ほとんどの農家は専業となりました。農協も借金をし、農家も経営が厳しく苦しんでいました。このままでは農家も農協もつぶれてしまうと危機感を強めていた時に、生き残りのヒントをくれたのが消費者のみなさんでした。この頃、大規模生産による効率主義で超密飼と薬づけ飼育がされており、これに食の安全、安心の面で消費者のみなさんからの疑問の声が上がっていました。

昭和59年（1984年）から愛知経済連とみかわ市民生協の取引の関係で、当JAが指定産地となり生産者の交流が始まりました。安全、安心な鶏肉をつくり、差別化することで生き残りをかけることにしました。1団地5万羽の飼育試験を1年やり、20日間休薬鶏の生産に成功しました。法律的には休薬期間1週間で良いところ、コスト計算等をし、休薬期間20日は限界でした。この差別化商品が理解され安定した価格で取引ができるようになり、息がつけました（現在は全期間抗生物質抗菌剤なしで飼育）。

東栄町農協が平成4年（1992年）に新設やまびこ農協合併にあたり、本店のみを残し、6支店は廃止することになりました。そのうちの1支店では、管内に店もなく生活用品も買えない状況となり、そこで、みかわ市民生協との交流の中で、支店担当職員による配達を始めました。現在はNPO法人が引き継いでいます。町内全域の独居高齢者への生協の個配が行われており非常に喜ばれています。

実践報告 ⑤社会福祉法人の実践から

社会福祉法人 名北福祉会 黒川富子さん

社会福祉法人の名北福祉会の黒川です。よろしくお願いいたします。

名北福祉会がある地域は、名古屋市北区の真真中で、人口17万人、1960年代は紡績工場がいっぱいあったところでした。70年代に入り、大手の工場が市外に転出し、公営住宅や民間のマンションが多くつくられました。現在では、高齢化率の高い、生活保護の方の多い地域となっています。社会福祉法人の名北は、来年で共同保育所を設立して50周年を迎えます。この歴史の中で、保育園から、障害者、高齢者、ヘルパーステーションなど小さな事業をいっぱいやっています。

子どもたちの分野では、3人の赤ちゃんの共同保育所として出発しました。設立当時から「赤ちゃんを他人に預けて働くのは鬼のような親だ」などの批判がありました。それでも私たちは「子供が集団の中で育つことは大事だ」「働くお母さんを支える」ということで、胸をはって歩こうとしていました。そうした時代でしたが、私たちの子供たちをきちんと成長させるためには、地域の教育力も高めていかなければいけないと考えていました。新たなマンションができはじめている中で、一人ぽっちのお母さんをなくそうという取り組みをして来ました。1996年に大きな事件がありました。保育園をはさんだ2筋目の道のマンションでふたりの子が焼死しました。火事の前から、町内のお母さんの間では、いつも夕方になると、「お母ちゃんお腹へったよ」「早く帰ってきて」と大きな声で叫んでいたということでした。まっ



JA愛知東 片桐邑司さん



名北福祉会 黒川富子さん

たく知りませんでした。その翌年、保育園の隣に大きな公園があり、暗くなりかけたころ、小さな2歳か4歳くらいの子どもたちが遊んでいました。お母さんもいません。「どうしたの?」と、一緒にアパートまで送って行きました。誰もいません。窓から覗くと、動くものがあります。目を凝らすと、赤ちゃんがハイハイしています。びっくりして「おかあさんは?」と聞くと、「帰ってこん、昨日出たまま。」と言います。道一本隔てたアパートでそんなことがあり、とってもショックで、なんとしても地域の中でネットワークをつくらないと思いません。

2004年によく地域の子育て支援は大事と叫ばれはじめ、地域子育て支援センターということで名古屋市より指定されました。名北福祉会として地域のお母さんたちが集まれる場所として、子供を連れてくることのできる場所をつくりました。保育園、幼稚園で、保健所や区役所や図書館の協力の中でやっています。地域の全部の子供たちのことを掌握していらっしゃる地域の児童委員さんにも加わってもらって交流をしながらやってきて、点から線へ、線から面へと広がってきたと感じています。

保育園では障害児を受け入れてきました。地域の障害児を持った親の会をつくっていきこうということで「ミカンの会」をつくってきたことが障害児への取り組みの出発点になりました。作業所の必要性を言う中で、障害児学級の放課後に行ける「のびのびクラブ」という普通の学童保育所のような障害児のクラブをつくり、2000年に無認可の共同作業所をつくったところ、地域の方から土地を寄付され、35名規模の名北共同障害者作業所という施設をつくりました。授産所に通いながら自立して生活できるようにグループホームもつくってきてお

ります。

また名北福祉会は地域のお年寄りのたくさんの方に支えられてきています。高齢の域に入り、一人くらしが増え、みんなと話し合う場所が欲しいということから、保育園のホールを日曜日に使って、楽しい食事のつどいを開催してきました。これは20年間続き、200回続けてきました。今は開催していませんが、そういう方たちで、週2回くらいどこかにたまっておしゃべりをする場がほしいということで「憩いの家」を98年につくりました。この取り組みの中で、弁当づくりを始め、そのお弁当を配達する中で、弁当が昨日のまま残っていることがあり、次に持っていった時にまだ残っていて、警察にも入ってもらい、家の中を開けてもらったことがあります。おばあちゃんが寝てみえましたが、声が出せない、電話もとれない状態で、後一步遅かったら亡くなられていくくらい衰弱してみえました。お弁当を届けるだけでなく、安否確認に繋がってきたんだということをもっと感じたということがあります。

このように名北福祉会は今20ほどの事業をやっていますが、まだまだ十分な施設ではなく、保育園なども足りず、一人一人の要求に合う福祉施設づくりを進めていくことは大きな課題となっています。北区の子育て支援がやっと点から線、線から面、できあがってきたことを教訓にしながら、すべての人たちが助け合える地域づくりにしたいと思っています。同じ思いをする北医療生協がお弁当の配達をしており、もっと協力しあい、たくさんの方の見守り体制を期待しつつ頑張っていきたいと思っています。

地域と協同の研究センター設立15周年・NPO法人化10周年記念第7回東海交流フォーラム

「協同っていいかも？」

5つの分散会では・・・

午後は、5つの分散会で交流し、テーマを深め合いました。それぞれの分散会ではさらにいろいろな実践報告を行っていただきました。そのごく一部を紹介させていただきます。詳しくは後日発行予定の、第7回東海交流フォーラム報告集をご覧ください。

分散会1

◆NPO法人仕事工房ポポロ 白木久史さん

いわゆるニートだとか引きこもりの若者たちを支援していきこうという活動を行っている団体です。我々の理念は、君は一人じゃないんだ、ゆっくり歩みながらみんなと新しいつながりを持っていきこうと、いうのをスローガンでやっています。

◆安心して暮らせるネットワークのつどい、三重のつどいについて 中島啓美さん

安心して暮らせるネットワークづくり～地域で支え合う高齢者福祉を、みんなで考えましょうというんな団体の方に参加していただき開催しました。三重のつどい～基調講演、名張市の給食ボランティアグループ「あいーあい」、コミュニティーカフェ、津医療生協、音楽療法の取り組み報告がありました。



分散会2

◆コープぎふ益田センターの「生協まつり」の開催 児玉幸夫さん

この3年間『生協まつり』を開催しています。地域で広げるのに限界になってきたので、ちょっと思い切って楽し

いことやろうというのが、最初のきっかけです。大切にしたいのが、来た人に喜んでもらえることと、家族で来てもらって、「楽しかったね」といってもらえることをしようということなんです。



◆**コープあいち新城センターでの東菌目配達の取り組み**
竹内 彰さん

山間の地域で、生協の職員で配送に出ているのは3人だけです。あとは女性のパートさんや、委託の業者さんでまかなっている小さなセンターです。そうはいつても地域からの要望は多い地域で、実際普通のくらしをまかなうため大変多くの人に生協に入ってもらっています。

分散会3

◆**常設の子育てひろば「恵方の家」を開設して** **内藤 穂波さん**

2010年7月5日昭区和恵方町に小さな一軒家が地域デビューしました。池内わらべ保育園「恵方の家」です。1年間続けられるかどうか不安という中で始めました。今、保育園はその保育園の子どもや父母だけでなく、地域全体のこどもの育ちや、家庭支援の役割も担っています。



分散会4

◆**南医療生協「地域だんらんまちづくり」** **磯部ヒロ子さん**

組合員、役職員、地域の人たち、誰もが参加できる「千人会議



を4年間、毎月1回実施し45回で延べ6000人の知恵を集めました。そんな中で南生協病院ができました。専門の業者はもちろん入院患者さんも組合員が手伝い、組合員はボランティアで引っ越しをやりました。

◆**安心して暮らせるネットワークのつどい** **近藤鉄次さん**

ネットワークのつどいには初回から参加しています。初回は関心者だけで集まり悩みを交流しました。その後医療生協をはじめ地域で活動するいろいろな人たちが参加するようになり、4回目は、地域の問題解決にむけてネットワークをつくり問題を受け止めることを相談しました。

分散会5

◆**コープみえの環境活動** **妹尾 成幸さん**

コープみえでは、2月11日（金）に津市の三重県教育文化会館6階多目的ホールにおいて、「環境が救う私たちの地域とくらし」と題して、環境シンポジウムを開催しました。県内から、NPOや環境団体、行政、三重大学の学生、コープみえ組合員、三重県生協連の皆さんに参加していただきました。

◆**コープみえの平和活動** **橋本 直行さん**

三重の北勢地域での平和の取り組みについて話します。北勢地区平和のつどい実行委員会は2002年に発足しました。2003年に県内の生協が合併し、コープみえが誕生しました。実際には、三重県原爆被災者の会とみえきた市民生協で、北勢地域に平和の灯をともしつづけようとして活動しています。

◆**三河地域での平和活動** **安間 慎さん**

「平和都市をめざそう豊橋市民展」は豊橋まつりの一分野です。豊橋まつりに自衛隊が参加することに反対する運動があって、そこから、ただ単に反対ではいけない、まつりに乗り込んでいこうということで、入って行きました。1989年、豊橋空襲を語りつぐ会を結成しました。去年は、豊橋空襲の体験画展を開催し、ギャラリートークも行いました。



INDEX

- 「協同っていいかも」を指針に— 東日本大震災支援活動のなかで **向井 忍** 1
- 東日本大震災への救援・復興支援と震災対策の取り組み状況 **2**
- 第7回東海交流フォーラム「協同っていいかも？」実践報告～協同っていいよね！現場からの問いかけ～ **3**
- 5つの分散会では… **7**

2011年 4月25日(偶数月25日発行)

定価200円

(税・送料込み。年会費には購読料が含まれています)

発行 特定非営利活動法人地域と協同の研究センター

代表理事 川崎直巳

〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通1-39

TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315

E-mail AEL03416@nifty.com

HP <http://www.tiiki-kyodo.net/>

1 ページの写真は、日本生協連震災支援活動ブログより戴きました。いわて生協配達トラック(宮古市)です。